

異なるものをつなぎ、創造を生む場を考えるための10冊

異文化や異分野が混じり合うことで、新たな価値や関係性が生まれます。
今号で紹介した事例の理解をより深める助けとなる10冊を選びました。



6 『人類の歴史とAIの未来』

AIは人間の仕事を奪う脅威か、それとも救世主か。そんな両極端な論争が生まれる背景をひもとき、AIの未来を予想する。仮に、姿や思考まで人間と寸分変わらないAIロボットが登場したとき、自己はあるか、痛みを感じるのかといった問題にも言及。AIを貴方がどう捉えるかは、“人を人たらしめるものは何か”という問いに帰結すると説く。

バイロン・リース=著 古谷美央=訳
ディスカヴァー・トゥエンティワン/2019年



7 『〈弱いロボット〉の思考』

ひとりでは何もできない〈弱いロボット〉を通じ、コミュニケーションについて考える。自分ではゴミを拾えない「ゴミ箱ロボット」、オドオド話す「トーキング・アリー」など、不完全なロボットに人は健気さを見出し、自らゴミを拾い、手伝い、その声に耳を傾けるようになる。ロボットと人が共生する、ひとつの在り方を示す。

岡田美智男=著
講談社現代新書/2017年



8 『つながる図書館』

2000年代中頃から日本各地で始まった新世代図書館誕生の動き。「市民が主役の情報社会」を目指すべく日本独自の図書館改革がいかに行われつつあるかを、著者は「コミュニティ再生=つなぐ力」の視点から丹念に取材している。それぞれの地域に根ざした豊富な事例が、図書館問題を自分ごととして考えるうえで最適だ。

猪谷千香=著
ちくま新書/2014年



9 『未来をつくる図書館』

映画化により、日本でも話題のニューヨーク公共図書館。利用者をして「図書館なしで今の自分はない」と言わしめる、ビジネス、アートなど市民活動への幅広い支援はいかにして可能になったのか？情報のデジタル化、実践的内容のセミナー、市民による地域密着運営など、「つなぐ」場としての図書館を考えると最初手に取るべき一冊。

菅谷明子=著
岩波新書/2003年



10 『ちゃんぽんと長崎華僑』

福建の郷土料理に、長崎ならではの食材とアレンジを加えて生まれた「ちゃんぽん」。その名は「吃飯(チイファン=ご飯食べた?)」が由来だとも。これを考案した「四海樓」創業者・陳平順の曾孫が綴る本書は、おなじみの麺料理をテーマに、異国の文化・習慣と結びつき生きる「落地生根」の華僑の精神を論じて実に興味深い。

陳優継=著
長崎新聞新書/2009年



1 『梅棹忠夫の「人類の未来」』

—暗黒のかなたの光明—

国立民族学博物館の初代館長である著者は、1970年頃、文明学者として「人類の未来」の姿を描く構想を立てていたが、未完に終わる。本書では、当時の資料や対談記録を掲載し、さらに氏と面識がある者となし者、異なる世代の有識者による未来論も語られている。そこに自身が思う人類の未来像を重ねてみるのもいい。

梅棹忠夫=著 小長谷有紀=編
勉誠出版/2012年



2 『欧米先進事例に学ぶ』

デジタル技術の活用により電力市場で台頭しつつあるエネルギーベンチャー。欧米諸国の電力市場で生じる構造変化を、具体的事例とともに紹介する。技術的変遷だけでなく、規制緩和の流れなどにもふれられており、電力業界の変化と展望を把握するのに大いに役立つ一冊。

アビームコンサルティング、ガスエネルギー新聞=著
毎日新聞出版/2017年



3 『ページと力—手わざ、そしてデジタル・デザイン』 [増補新版]

日本を代表するブックデザイナーが、日本語の表記の不思議さについて論じるユニークな一冊。書くときはヨコ、読むときはタテを好む独自性から、濁点の点が2つある理由、文と改行位置の関係、伸ばす「ー」(音引き)が行頭にきてはいけない理由など—さまざまな文化が遭遇し、絶えざる変化を遂げてきた日本語の特質を再発見できる。

鈴木一誌=著
青土社/2018年



4 『時間とヴァーチャリティ—』

ポール・ヴィリリオと現代のテクノロジー—身体・環境—
場所と時間、人体の内部と外部、心と体の境界も超え、新たな“接続”を猛然と実現しつつあるARやVR。技術革新について、もたらす「速度」という視点から論じた仏人思想家ヴィリリオに依拠した本書は、ヴァーチャルの浸透に対するリアルな立ち位置を示すオルタナティブな一冊だ。

本間邦雄=著
書肆心水/2019年



5 『思想としてのミュージアム』

—ものと空間のメディア論—
ミュージアムは、モノを展示するだけではない。社会のさまざまなメッセージを媒介するメディア(媒体)として捉えることで浮かび上がる、ミュージアムの思想、コミュニケーション、そしてその社会的な意味について考察する。西洋近代からの歴史背景も踏まえた論旨の積み重ねや、冒頭に掲載される学生たちの率直な意見も興味深い。

村田麻里子=著
人文書院/2014年

